起死回生の「母親大会」
―高知新聞より
ひとりぼっちの組合員をつくらない

高教組委員長　竹島久美

高知新聞に「音十愛11歳奇跡の笑顔　全盲・重複障害を生きる」という記事が連載されています。その⑩（六月二〇日付）の見出しは、「あっという間に追い風　起死回生の『母親大会』」というものでした。

二〇〇八年、お母さんは音十愛（おとめ）ちゃんを盲学校の幼稚部に入れて専門教育を受けさせたかったけれども、「鼻腔チューブの入った医療的ケアの必要な子は前例がない」として受け入れてもらえなかったのが、お母さんが母親大会で訴えたことをきっかけに、あっという間に追い風が吹き始めたというものです。

高教組女性部では、高知県母親運動連絡会に常任委員や運営委員を出し、障害児・者の分科会は、障害児学校部の皆さんが運営を担っています。

この当時、私は女性部の書記長でした。私は直接携わってはいませんでしたが、障害児学校部の皆さんは本当にがんばっていました。女性部の活動の中で、母親運動はけっこう大きな比重を占めています。やっているとなかなか大変なのですが、こうやって記事に出てくるとやはりうれしいものです。

母親大会について、「同大会は、戦争反対や子育て、教育、暮らしの諸問題に母親の立場から訴える社会運動で、困りごとを抱えた母の駆け込み寺的存在」と紹介されています。これを読んで、「県大会が近いのにたくさん駆け込んできたらどうすんだ」と思ってしまったのですが、今は委員長の立場ですので、私たち組合、執行部に駆け込み寺の役割を果たす力量があるのだろうかとも考えさせられました。

母親大会のスローガンは、「生命を生み出す母親は　生命を育て　生命を守ることを望みます」ですが、合い言葉は、「ひとりぼっちの母親をつくらない」です。これにならって言えば、「ひとりぼっちの組合員をつくらない」、さらには、「ひとりで悩んでいる生徒や教職員、保護者をつくらない」、それが組合の役割なのかなと思います。

「定時制高校に戻って」
行政から学校現場への管理は具体的な文言が多い

東工業高校定時制（地歴・公民）　高橋紀子

初めて教壇に立ったのは定時制高校でした。その後いろいろな学校を巡り、昨年再び定時制高校に異動しました。長い道のりを経て、またスタートラインに立ったような気持ています。

現在の定時制課程は、昔とはずいぶん変わっています。成人の方は少なく、生徒の多くは全日制課程の生徒と同じくらいの年齢です（4年間通うので、卒業の時に二十歳を迎えている人もいますが）。経済的な事の他に、中学校での不登校や学力の不足なども定時制を選ぶ理由です。きちんと自立して頑張っている生徒もいますが、多くの生徒は仕事と学業の両立に苦労しています。

私は地歴・公民を担当していますが、暗記することが多くあまり生徒に人気のある科目ではありません。生徒の多くは仕事に疲れ、夜間の授業時には集中力も低下しています。友達とのおしゃべりに夢中になっている中、いかに勉強に向かわせるか、再び自分の技量を試されています。失敗の連続ですが、やはり読解力や物事の判断力、文章力が社会に出て役立つものではないかと感じ、どうすれば生徒にそういった力をつけられるかを模索する毎日です。

学校現場においては、今年新たに「チーム学校」という標語が教育現場に導入されました。教員同士が連携を取り、チームとして学力の向上や学校に運営にあたる、ということですが、個人的には昔から当たり前の事であると思います。近年、行政から学校現場への管理は具体的な文言となり、却って教育の在り方や教員の行動の幅を狭くしているように感じます。

生徒一人一人の幸せのために、こと細かに手取り足取りして育てる。今年からの18歳選挙権についてもしつこいほど説明会を行うよう通達してきますが、生徒たちの多くは選挙権にとまどっているのが現状です。指示に従うだけでなく、自分で考える力を身に付けること。おかしいことはおかしいと自分で判断できる力を生徒に育てられるよう、今年も授業を通して頑張っていきます。

「足元からの探求」

避難所・家庭の非常時エコ対策

山下正寿

東日本大震災・福島原発事故直後の６月から、南相馬市の浜どうりの調査にはいり、避難の時のことを聞くことができました。また、幡多に福島から避難してきた人たちから「避難所が死ぬほど寒く、寝むれなかった」「暗闇で余震が起き、情報が入らずパニックになった」などの苦労話を聞きました。そのころに結成された幡多自然エネルギー研究会が毎月１回の研究会を経て、南海地震を想定した避難所のエコ対策案を作りました。費用をあまりかけず、少し昔のくらしの知恵を使い、自分達の力で行う事。集落の古老に学び、子供たちのエコ学習と結びつき、新たな仕事づくり、地域資源活用の道につなげる提案です。

１、薪ストーブ・・・薪（まき）は集落で相談し、公共施設の木なども活用し、保管しておきます。薪割り体験を子供たちに教えること、薪で火をおこし、料理をつくることも学べます。普段も避難所など広い場所は、薪ストーブ暖房が好評であり、費用も安く、安全対策をとれば実用的です。

２、木炭・・・木炭は数年間、保存が可能です。普段から避難所の湿気、臭気対策として利用でき、いざという時に大切な燃料として活用できます。できれば通気性のある袋に入れて、床下に置くか、タワラを避難所の片隅に置くことがベストです。

３、ドラムカン風呂・・・長期間にわたって風呂に入れない場合に対応できるようドラムカン風呂を作って、普段は雨の降らない場所に、ひっくり返して置いておきます。ドラム缶の上のフタをくり抜き、下に水抜きの鉄パイプをつければできます。使用するときはブロックで足場をつくります。

４、湯タンポ・・・避難所が学校などで、暖房が利き難い場所にいて、厳しい寒さの時にペットボトルにお湯を入れて足元に置きます。

５、蓄電式ソーラー発電・・・オイル使用の発電機はオイル切れで機能しません。情報を確保する小型で安価なソーラー発電で夜間も利用できる蓄電式が求められます。

以上のエコ対策を自主防災組織や地区でのお祭り、初会などの準備中に相談し、点検すればよいと思います。高知県から助成を受け、大月町で実践した様子は、「幡多自然エネルギー研究会」のホームページで見てください。私の家は、蓄電式ソーラー発電で、必要な家電を使い、四国電力使用料金は月１０００円ほどです。「電気は地産地消で」節電と自然エネルギーが普及すれば、原発は止めることができます。